

宇野重規著 『民主主義のつくり方』

鎌田, 厚志
九州大学大学院法学研究院 : 助教

<https://doi.org/10.15017/1657818>

出版情報 : 政治研究. 62, pp.149-156, 2015-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン :
権利関係 :

書評

宇野重規著『民主主義のつくり方』（筑摩書房、二〇一三年一〇月、二二八頁）

鎌田厚志

はじめに

民主主義は、歴史上さまざまに論じられてきた。^①近年の日本の民主主義においては、「政治的麻痺」^②とも呼ばれる政治の停滞が長期に渡って継続し、多くの人が苛立ちや失望を抱いている。

こうした、いわば民主主義の危機とも言える状況の中で、本書は、「プラグマティズムの思想を一つの導き手として、困難な状況に陥った現代民主主義の再生をはかる」という意図のもと、民主主義のモデルをヘルソー型からプラグマティズム型へ転換することを大胆に提起し、その作業を通じて、民主主義への不信が募る現代にあつて、あえて民主主義を擁護することに挑戦している。

著者は、本書を、以前に著者が執筆した『トクヴィル 平

等と不平等の理論家』（講談社選書メチエ、二〇〇七年）と『〈私〉時代のデモクラシー』（岩波新書、二〇一〇年）に続く、「デモクラシー三部作」の三冊目として位置付けている。『〈私〉時代のデモクラシー』において、著者は現代民主主義の抱える困難を指摘しつつ、「私」と真摯に各自が向き合い、「私」に立脚することにより、「私たち」へと向かう道を展望し、デモクラシーに希望を見出すための道を模索していたが、本書ではより大胆に希望のありかを探り、示している。

一 本書の内容

本書は、冒頭の「はじめに」と四つの章と末尾の「おわりに」から構成されている。

「はじめに」の冒頭で、著者は、少子高齢化と低成長のもとで負担の再配分が迫られる「収縮時代の民主主義」の困難さを指摘する。そのうえで、民主主義の本質を「自分たちの社会の問題を、自分たちで考え、自分たちの力で解決していくこと」、つまり「自分たちの力で、自分たちの社会を変えていくこと」と述べる。

この民主主義の本質理念に照らし、ルソー的な発想と市場モデルの両方について著者は疑問を述べる。まず、ルソーと

その背景にある主権論における、一つの優越的な意志が存在するというロジックには抑圧性があることを指摘し、一般意志を抜きに民主主義を構想することは可能ではないかと問う。次に、現代において流行する市場モデルで政治を語ることに対し、上記の民主主義の本質の理念を放棄する時、人は無力になるのではないかと問う。

そのうえで、人間とは必ずしも一つの明確な意志を前提にはできず、むしろ多様な情念に突き動かされる存在であり、意志とは事後的に発見されるものではないかと問う。この視点から民主主義を捉えなおすことを著者は提起し、その手ばかりとしてプラグマティズムを参照することを提案する。

第1章「民主主義の経験」では、トクヴィルを参照しつつ、アメリカの出発点には民主主義の「種子」、つまり「地方自治」の習慣」と「人民主権」の教義」が存在していたことを著者は指摘する。民主主義とは、移民社会であるアメリカにおいて、名も無い人々が実際に経験したことやその際の感覚であり、そうした原初的な平等の感覚の経験は、制度としての民主主義が確立していく中で忘却されていたが、ときとして復活したことを著者は指摘する。

著者は、ハイエクとアレントにおける原初の平等関係である「イソノミア」への着目や、トランセンデンタリズムにお

ける強烈な理想主義と個人主義を指摘したうえで、プラグマティズムにおける「経験」についての議論を考察する。

プラグマティズムにおいては、ものごとの本質が日常経験の背後にあるとは考えず、「経験」や「実験」が重要視される。経験とは、人々が他者とともに、その行動によって世界とかわつていく過程（プロセス）である。

プラグマティストの一人、ホームズは、経験とは「人間とその環境の相互作用から生じるすべて」であり、社会的なものであるとした。また、ジェームズは、経験は個人の主観より先行すると考え、他の個人と切り離された抽象的な個人の要求を前提に社会を捉えていくべきではないと考えた。

デューイは、民主的社会とは一人ひとりの個人がさまざまに実験し経験を深めることを許容する社会であると考え、学校・職場・政治的制度に支えられて人々がともに行為し経験を共有することが重要だと主張した。

さらに著者は、藤田省三の議論を参照する。藤田は、敗戦直後の日本が持っていた「明るさ」を、鑄型に人をはめこむ現代社会と対比し、やり直しのための出発点としての「戦後の経験」を説いた。原初的自由と民主主義の経験が、高度経済成長の中で風化したことと、そうであるがゆえに敗戦直後の「経験」の想起に藤田が努めたことを著者は指摘している。

第2章「近代政治思想の隘路」では、自分を示すことを恐れ、他者とコミュニケーションをはかることに消極的な人間像が近代政治思想において前提になってきたことの問題を著者は指摘する。

著者は、チャールズ・テイラーの「緩衝材で覆われた自己」の議論を参照しつつ、近代的人間像は決して自明のものではなく、歴史的に生み出されたものだったことを指摘する。近代において、人間の内と外が分断され、宗教と政治も分離され、政治は「やせこけた概念」になり、そこではじめて社会契約論は登場した。

さらに、著者は、近代政治思想における「依存への恐怖」という特徴を指摘する。近代政治思想には、政治を担う市民は自律した存在でなければならず、他者への依存からの脱却がなされるべきだという観念があった。ルソーや、ハイエク、ベシック・インカムにも依存への忌避が見られた。

そのうえで、「依存への恐怖」に対する異議申し立てとして、ケアの倫理学の存在を著者は指摘する。人間は他者の支援を必要とし、「依存」は人間という存在にとって本質的である。子どもや高齢者、障害者などを手助けするケアの活動は、自立した個人のモデルの近代政治思想では位置を占めることができず、「私」の領域にケアの問題が封印されてきた。その結

果、人間がもつ脆弱性が見失われた、と著者は指摘する。

依存が忌避された理由として、著者は主権国家の問題を挙げる。つまり、権力を集中した国家と、封建的諸関係から切り離された諸個人が向き合い、両者を媒介する論理として社会契約論が構築されてきたという特有の事情を指摘する。さらに、身のまわりの諸個人への依存を嫌うことが、実は国家や多数者に対するより大きな依存へと結びつくというトクヴィルが指摘したパラドクスに著者はあらためて留意する。

著者は、こうした問題に対し、相互依存的な自由を提起し、依存と自由の緊張関係を自覚しつつ、いかなる依存をどの程度まで認めるか、繊細な思考の必要を提起する。

第3章「習慣の力」では、習慣とは、単にパターン化した行動様式を意味するのではなく、時間をかけて形成され、身体化されたものであり、人格や人柄を映し出すものであることが指摘される。こうした習慣に対する議論は、中世以来の伝統があるとしつつ、プラグマティズムにおける習慣についての議論として、著者はパースとジェイムズとデューイを参照する。

パースは、混沌とした宇宙に秩序が生まれるのは習慣の力によるとする。習慣とは、個別的な偶然性を全体的な秩序へと媒介するものであり、新たな状況に応じて変化し成長する

力だとされる。習慣とは、過去からのしがらみよりはむしろ、未来における行動との関連で意味を持つものであり、「このように行動するであろう」というものだという。習慣はたえず修正され、信念は経験によつて検証される。習慣は社会的な信念として人々に共有され、受け継がれていくとされる。

ジェイムズにおいては、その信念が人々のいかなる行動を生み出し、いかなる結果をもたらしたかが肝心だとされる。

「信じようとする意志」「信じようとする権利」が擁護される。信念が現実化するにあたり、習慣が重要な役割を持つ。人間の行為のほとんどは、習慣によつて成り立っており、人生の成功はいかに有益な習慣を身につけるかにかかっているとされる。

デューイにおいては、習慣とは機械的な反復ではなく、状況に対応するための「道具」であり、習慣がその人の欲望や活動を生み出すとされる。習慣は社会的コミュニケーションと不可分であり、習慣の変革は個人の行動を変化させ、社会を変革する梃子となる。デューイは、「実験としての民主主義」の鍵は習慣だとした。人間は自らの環境を変えることができ、環境を変えることで、自らの習慣を変化させ、成長させることができる。習慣は成長・発展し、社会的なコミュニケーションを介して他の人々へ伝播する。

こうしたコミュニケーションによる可変的な習慣を重視する社会や民主主義への見方は、議会制民主主義とは異質であり、市場メカニズムによる調整とも異質であると著者は指摘する。社会のユニットになるのは、必ずしも一人ひとりの個人ではなく、個人と個人との関係であり、習慣や行為を介して結びついた人と人との動態的なつながりである。このようなつながりが民主主義を構成するという信念がプラグマティズムである。

現代におけるこうしたプラグマティズム的な発想の事例として、著者は、ハイエクにおける習慣の集積としての社会観や、ネグリ／ハートが「共」を発展させる鍵を習慣に求めていることや、デューヒッグがローザ・パークスの影響について「習慣の力」を通じて分析している事例を挙げる。

さらに、著者は、「ソーシャル転回」に言及し、ウェブの発展で原子化した個人が社会的なネットワークにつながることに着目している。ウェブという習慣によつて、人々が無意識に結びつき、影響を受け、影響を与えるようになっていく現実を、著者は、ユートピアかもしれないディストピアかもしれないと留保しつつ、「ソーシャル・メディア」を通じて発展した現代の「民主主義の習慣」の行方に注目している。

第4章「民主主義の種子」では、二〇〇〇年代以降の日本

で「社会を変える」という言葉が政治に対する失望を背景によく言われるようになったことを著者は指摘する。この動きは、「どのよう、に社会を変えるか」(傍点原文)について高度に自覚的であるとする。その自覚のもと、社会を変えている事例を著者は挙げる。

まず、著者は、ソーシャル・ビジネスで病児保育を展開するNPO法人フローレンスの駒崎弘樹氏の事例を挙げ、実際に社会問題解決のための新たな習慣をつくりだし、他に波及している例をそこに見る。駒崎氏は、行政が見放し手を出さずにいる領域をNPOやソーシャル・ビジネスがカバーすべきだと主張し、「投票によらない社会改革」の可能性を模索し、自分たちの力で社会変革の「習慣」を生み出していこうとしていることを著者は指摘する。

次に、著者は、地域社会における事例として、島根県の隠岐諸島にある海士町を挙げる。海士町は人口の一割がイターソン(新たに移住してきた人)であり、あえて他の市町村と合併せず、少子高齢化と過疎化が進む中、島民全体で危機意識を共有し、住民同士の徹底した議論などを通じて地域を活性化し、人がつながるための新しいしくみとして「コミュニティ・デザイン」を住民参加により作成したことを述べる。

三つめに、著者は、岩手県釜石市の東日本大震災からの復

興の事例を挙げる。企業が生き残りのために地元との関係を積極的に強化している事例や、NPOの担い手の若者の生き方に触れつつ、土地に縛り付けられるのではなく、あらためて「故郷」を選び直し、地域との結びつきのなかに自分の存在意義を見出すタイプの主体がそこには見られると著者は指摘する。そこに、これまでの「地域おこし」とは異質な要素を含む新たな主体とその理念が生れつつあると展望している。こうした事例を通じて、主体は所与ではなく結果であり、相互の接触の中で多様な習慣が伝達されることを著者は指摘している。

「おわりに」では、バラク・オバマにおけるプラグマティズムの思想的影響やローティにおけるホイットマンとデュリーの継承を参照しつつ、政治の役割はすでに潜在的に人々が望んでいるものを言葉を通じて目に見えるように表現し、一人ひとりの「よりよいもの」への変革の「希望」を社会全体の変革へと結びつけていくことにあると著者は述べている。

以上の考察を通じて、最終的に著者は、一般意志の存在を前提にその実現を図るヘルソー型民主主義とは異なり、人々が行為の後になって自分の意志を発見するという契機と、行為を通じて人々が自らの意志を確認していくことの大切さに注意を促す。この行為を通じた実験と、それによる習慣の形

成や変革が、現代日本の各地でいま起こっており、新たな「民主主義の習慣」が地域社会や若い世代によってなされしていると著者は述べている。

二 本書の意義

まず、本書の意義として、アメリカのプラグマティズムを日本の民主主義再生のために大胆に参照している点が挙げられる。日本における西洋政治思想の研究は、戦前はドイツ、戦後は英仏を中心としたものだったことは周知のとおりである。鶴見俊輔によってアメリカ哲学（プラグマティズム）が紹介された後も、今日に至るまでプラグマティズムは人口に膾炙したとは言い難い。こうした日本の状況の中で、本書は、今後民主主義の知的リソースをどこに置くかという選択に關して、大きな刺激となることは間違いない。

二番目に、本書の意義として、プラグマティズムにおける「経験」や「習慣」の議論を丹念に辿り、孤立した個人でもなく、共同体を实体化する議論でもない、コミュニケーションにおける習慣そのものを基盤とした相互依存的な人間像を提起していることが挙げられる。これは、個人と集団のいずれかに偏るアポリアを回避するために有益な指針となると思

われる。

三番目の意義として、プラグマティズムの人間観や習慣論を明晰に整理した上で、最近のソーシヤル・ビジネスや地域社会の実践を敏感に捉え、これらの事例を新たな「習慣」として政治思想的に意味を見出し位置づけていることが挙げられる。これは、現代日本における希望のありかを示す貴重な試みと思われる。

三 本書の問題点

上記の意義を確認した上で、読み手である私の理解不足かもしれないが、以下の三つの点が疑問として残る。

一つめの疑問は、「経験」や「習慣」について参照する知的伝統をアメリカに置く際、民主主義において参照される経験が「原初経験」に限られてしまったのではないか、というものである。

自分たちが社会や国をつくるという感覚や経験、あるいは政治権力に対する抵抗の経験というのは、必ずしも原初経験のみには限らない。たとえば、ハワード・ジンが描く草の根の抵抗の歴史⁴や、色川大吉による明治自由民権運動の研究⁵、小熊英二による戦後民主主義の研究などは、私たちが民主

義というものを考察し、あるいは發揮する際に、大きな参考となる経験の脈脈を示している。原初経験にのみ民主主義の立脚点を置くと、こうした歴史が生かされないのではないか。

二つめの疑問点は、本書で提案される民主主義のつくり手や希望の考察事例が、「システム化から取り残された場所や領域」つまり「余地」に集中しているため、国家レベルの民主主義や政治についてどう考えればいいのかという問いが残ることである。

著者は『へ私』時代のデモラクシー』では国レベルの民主主義の孕む問題を指摘していたが、本書に限って言えば、冒頭で負担を配分する収縮時代の民主主義の問題を指摘しているのに、国レベルでの負担の再配分をどうするか、この問題にどう対処するかという事柄が十分に見えてこない。

たとえば、湯浅誠氏は、「最善を求めつつ、同じくらい、熱心さで最悪を回避する努力をする」(傍点原文)ことを主張し、そのことを「近くから広げつつ、遠くと架橋する」とも言い換え、現実の政策の調整過程にできる限りコミットし、負担の再配分が最悪の形でのしかかってこないようにする努力を重視している。⁽⁸⁾

現代日本における民主主義は、「余地」における新たな習慣形成とともに、国政レベルでの最悪を避けるための不断の努

力も要請されているのではないか。そして、後者の努力においては、政党政治に関連した「経験」や「習慣」を涵養していくことも重要なものではあるまいか。

第三の疑問は、民主主義やコミュニケーションを成り立たせるためには、なんらかの前提が必要ではないかということである。

本書において、著者は、プラグマティズムにおいては、何らかの共通の属性や、前もって共通の価値観を持つことは必ずしも不可欠ではないと述べる。⁽⁹⁾しかし、たとえば、著者も今後の重要性を指摘しているウェブ空間において、はたしてどの程度まで円滑な政治的コミュニケーションや有意義な習慣の伝播が成り立つかは現状では疑問である。ネット上におけるヘイトスピーチや根拠のない情報や極論の蔓延は、健全な議論の育成を妨げ、かえって世論を極端なものに誘導し煽動する危険を持っている。

ソーシャル・ウェブなどのネット上の空間が民主主義に資するものになるためには、礼節やマナーが必要になってくるのではないか。これはもちろんネット上のコミュニケーションに限らない。つまり、対他的なコミュニケーションを重視し、その実際の経験に基づいた民主主義を追求すればするほど、逆説的に、そのコミュニケーションを可能にするための

一定の作法や型が重要になるのではないか。そうした礼節や作法は、民主主義というより、むしろ民主主義に先立つ政治思想の伝統の中に見出されるものである。¹⁰⁾ 民主主義のコミュニケーションを求めると、それらの民主主義に先立つ礼節などの伝統の発掘が重要になるのではないか。

おわりに

以上の疑問点が読み手である私の理解力不足のため存在するとしても、本書ははるかにそれを上回る有意義な刺激や希望を与えてくれる。

著者は、本書を出版したのと同じ年に大学生向けの教科書として『西洋政治思想史』（有斐閣アルマ、二〇一三年）を出版している。その本の中では、古代から現代に至るまでの西洋政治思想の歴史を、該博な見識を駆使し、生き生きとわかりやすく叙述している。本書は、そうした西洋政治思想研究を背景に、真つ向から現代の抱える問題に対して取り組んでいる。西洋政治思想史研究と現代政治学あるいは現代政治への実践的な提言は、今日、分離しがちである。本書はあえてその架橋に挑んでいる点で、多くの示唆に富み、大きな勇気を与える一冊であることは間違いない。今後、民主主義をつ

くつていくために、重要な手がかりとなる一冊であることを疑わない。

注

- (1) 民主主義（デモクラシー）の歴史の変遷についてわかりやすく整理したものとしては、杉田敦「デモクラシー」、古賀敬太編『政治概念の歴史的展開』第六巻、晃洋書房、二〇一三年、がある。
- (2) ジョン・ダン「日本のたどる政治的麻痺への道——置き去りにされた民主的希望」、『思想』九三八号、岩波書店、二〇〇二年六月。
- (3) 鶴見俊輔『アメリカ哲学』世界評論社、一九五〇年。
- (4) ハワード・ジン『民衆のアメリカ史』上下巻、猿谷要監修・富田虎男ほか訳、明石書店、二〇〇五年。
- (5) 色川大吉『明治の文化』岩波現代文庫、二〇〇七年。同『新編 明治精神史』筑摩書房、一九九五年。
- (6) 小熊英二『民主』と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、二〇〇二年。
- (7) 『民主主義のつくり方』、二〇六頁。
- (8) 湯浅誠『ヒーローを待っている世界は変わらない』、朝日新聞出版、二〇一二年、二〇〇二頁。
- (9) 『民主主義のつくり方』、一三九頁。
- (10) 木村俊道『文明と教養の政治』近代デモクラシー以前の政治思想』講談社選書メチエ、二〇一三年。